実践事例

（郷土）矢作東小学校　３年

矢東探検隊

５月～２月（２６時間）

１　ねらい

本実践では、矢作東学区に古くから受け継がれているものや場所についての学習を、社会科と関連させながら進めることにした。見学や体験といった調べ学習を進めていくことで、実際に見る、聞く、といった学習を進めていくことで実感を伴った理解をさせたい。さらに、実践を通して、自分たちの住んでいる学区に対して興味を深め、学区のよさに気づき、郷土への愛着をもった子どもたちを育てていくことができるような学習にしたいと考えた。

２　実践の概要

（１）　学区の様子を知るために学区探険

３年生になって初めての社会科の単元に「わたしたちのまちみんなのまち」がある。総合的な学習と関連させて、矢作東学区を知るために、学校を中心に各方面に見学を行った。学区の様子を知るとともに、総合的な学習でも扱う、第二交通機動隊・山下食品・近江屋の場所や様子なども学習することができるようにした。実際に学区探険に行くと、第二交通機動隊や北城屋は子どもたちにとっても馴染みの深い場所であることがよく分かった。しかし、山下食品は学区の最西端に位置していることもあり、分からない子どもが多かった。

（２）　第二交通機動隊の見学

資料①　見学の様子

国道１号線沿いに位置している第二交通機動隊に見学に行った。中には保育園で見学に行ったという子どもも数人いたが、ほとんどの子は初めて行く場所である。そこでは、普段見ることができない部屋やパトカー、白バイなどを見ることができた。また、パトカーや白バイに実際に乗るなどの体験活動もでき、意欲を高めることができた。数多くあるパトカーや白バイを実際に目の当たりにして、驚いている子どもが多いのが印象的だった。自分たちの住んでいる学区にこんな場所があったということに気付き、一層興味と関心をもって見学していた。

（３）近江屋の見学

資料②　見学の様子

近江屋は、旧国道沿いにあり、学区に古くからある和菓子屋である。子どもたちは、「近江屋さん」と呼ぶなど、親しみをもっている店であることが分かる。見学に行く前に、行ったことがあるか調査をすると、ほとんどの子どもが行ったことがあるという結果になった。見学に行くにあたって、事前に質問したいことなどを考えさせたところ、「いつからやっているのか」や「何人働いているのか」など、営業形態の質問を考えている子どももいれば、「おいしい和菓子はどう作っているのか」や「どんな材料を使っているのか」のような、商品に関する質問を考えている子どももいた。特に普段から保護者と近江屋に

行っている子どもは商品に関する質問を考えている場合が多かった。実際に行ってみると、店長さんは快く質問などにも答えてくださり、子どもたちにとって満足のいく見学ができた。

（４）山下食品の出前授業

資料③　見学の様子

山下食品の従業員の方を学校にお招きして、出前授業をしていただいた。出前授業では、山下食品の方々の「納豆を好き嫌いせずに食べてほしい」という願いが伝わる授業を行うよう考えた。そこで、はじめに山下食品さんから納豆や他の商品の作り方の説明をしていただき、その後、体験活動を取り入れた授業を行った。体験活動では、納豆をおいしく食べることができるように、色々な食べ方を実践した。納豆に、ごまや梅干し、えごま油などを入れ、普段食べる納豆から少し味を変えて食べてみるようにした。納豆が嫌いな子どもでも、味が変わることで食べられる様子を見ることができた。子どもの中には納豆が食べることができるようになったという子もいて、山下食品の方々の願いが伝わったと感じた。

（５）それぞれのまとめと発表

資料④　発表の様子

３学期になり学級の中でグループをつくり、それぞれでまとめ、発表するようにした。グループで伝えたいことを考え、模造紙にまとめることにした。グループによっては模造紙だけでなく、リーフレットやパンフレットを使ってまとめていた。社会の授業で、新聞作りをしていたこともあり、誰が見ても分かりやすい形でまとめることを考えている子どもが多かった。

資料⑤　発表の様子

発表では、まとめた模造紙を使い、２年生に向けて発表するようにした。２年生は生活科で町探検をしており、町探検で見ていないところの発表もあり、食い入るように発表を聞いていた。また、２年生が飽きないように、模造紙だけの発表に加えて、クイズや歌を考え、発表する班もあった。特にクイズに関しては、２年生にとても効果的であったと思う。

３　実践を振り返って

子どもたちにとっては、自分たちの住んでいる学区のことを知っているようで、知らないことがまだまだあることに気付かされた実践であった。普段何気なく通っている場所にも、学区の誇れるものがあるということを、子どもたちが気付くことができたことは良かったと思う。ただ、そのためには教師の支援が必要と感じた。これからも学区に関心を持ち続けるようにするとともに、学区への愛着をさらに深めさせたいと思う。